# 地域共同体の意識こそ、自然災害への備え

当 HP の先の記事「農耕民族の DNA が、脈々と受け継がれているのかも…（HP「雑学 BN」の 随想等関係（Ｘ）、2013.03.06.：参照）で「日本人は、農耕民族かも？」と触れた。

農耕するにはその土地に定住するということであり、定住していると地震と津波、台風や豪雨による川の増水・氾濫、等々の自然災害に昔から遭遇してきたであろうし、人々は同じ災害に遭う頻度が高いから、その自然災害にどう思いどう生活等に工夫してきたのかなあと、ふと思っていた。

そうした折、新聞の書籍広告で「自然災害と民俗」が目に入り、購読した。
筆者は民俗学者であり、全国各地を回り古文書、古老の話、伝承話、民話、古い地図、写真等々を紹介しながら、地震と津波、台風や豪雨による川の増水・氾濫、吹雪や雪崩、山崩れや山地崩壊、火山噴火と降灰、冷害や旱天（かんてん）、霜、等々の自然災害に人々はどう対処・対応してきかを、信仰、呪術、年中行事、伝説、等々に民俗知、伝承知を探る民俗学の視点からの解説の書であった。

また、その土地に定住し同じ自然災害の被害を少しでも少なくするために、家の造り、村の配置を工夫した様子や、少しでも自然災害の被害に遭わないようにとの人々の祈りが家や地域の祀り事や伝承行事、祭りにどう込められていたかをも紹介・解説されていた。

やはり、子どもの頃から祭りの由来は知らなくても祭り好きな我々日本人には、農耕民族の DNA が、脈々と受け継がれているようである。

自然科学の発達のお陰で自然災害という事象の起因も分かるようになって、複合災害に備えて土木的・科学的対応も出来るようになってきたが、３．１１の大震災のように自然災害は人間の英知・備えを越えることもある。

四季のある自然豊かな国に住む我々日本人は、自然からたくさんの恵みを受けて生活してるが、一方、自然災害という牙で我々の暮らしを脅かされることも覚悟しつつ、その備えは、現代社会の個の生活に比重をおくような風潮に惑わされずに、地域共同体として日頃から協力し合う意識もまず必要ということだろうなあと、本書を読んで再認した。

阿部幸泰　　（2013 年 6 月 15 日　記）